



2019年5月 第17巻第5号

かく語りき—聖人の言葉

「高ぶる感情の波を一つ抑えるたびに、君は一つ勝利を刻む。ゆえに、怒りに怒りで返さないことは、真（まこと）の道徳であるだけではない。良策でもあるのだ。キリストは『悪人に手向かってはならない』と言った。この言葉の真意が分かるのは、これが道義的に正しく、かつ実は最良の策だと気付いたときだ。怒りをあらわにすれば、エネルギーを浪費するだけなのだから。君たちの心に怒りと憎しみを抱かせてはならないのだ」

…スワミー・ヴィヴェーカーナンダ

「己の道を阻む悪や誘惑に対峙して克服し、生来の熱情を征服し昇華して初めて、人は己を純粹だと言える」

…預言者ザラスシュトラ

今月の目次

- かく語りき—聖人の言葉
- 2019年6月の予定

- スワミー・ヴィヴェーカーナンダ 第156回生誕記念祝賀会およびマハートマー・ガンディー第150回生誕記念祝賀会を開催

- スワミー・ヴィヴェーカーナンダ 第156回生誕記念祝賀会
マハートマー・ガンディー第150回生誕記念祝賀会

スピーチ

「マハートマー・ガンディー：彼の生涯の現代社会での意味と現代日本社会との関わり」

上智大学 アジア文化研究所客員所員
ヴィヴェイク・ピントゥ博士 (Ph. D.)

- 日本ヴェーダーンタ協会、日本ヨーガ療法学会広島大会研究総会に出店

- 忘れられない物語

- 今月の思想

6月の予定

- 2019年6月の生誕日

ヴィシュッダ・シッダーンタ (Vishuddha Siddhanta) 暦に基づくベルル・マトの暦では、2019年6月に生誕日はありません。

・6月の協会の行事

6月2日(日) 14:00~16:00

逗子午後例会(自主勉強会)

場所: 逗子協会本館

詳細は協会ウェブサイトをご覧ください。

お問い合わせ: benkyo.nvk@gmail.com

6月11日(火) 14:00~16:00

『ラマクリシュナの福音』の勉強会

場所: 逗子協会本館

お問い合わせ・お申し込み:
benkyo.nvk@gmail.com

※前日までに上記の宛先にメールで予約が必要です。

※日程変更や開催中止になることがありますので、協会ウェブサイトで事前に確認してください。

6月17日(日) 10:30~16:30

お釈迦様生誕祝賀会

場所: 逗子協会本館

10:30 瞑想

11:00 聖句、般若心経、賛歌

講話「お釈迦様の智慧と慈悲」

善通寺尼僧 佐藤浄圭さん

12:00 プラサード

14:45 Q&A

16:30 茶菓

6月28日(金)

ホームレス・ナーラーヤナへの奉仕活動

現地でのお食事配布など

お問い合わせ:

urara5599@gmail.com

6月の土曜日 10:15~11:45 (90分)

ハタ・ヨーガ・クラス

(月に3回で基本は第1、2、4土曜日。

変更の際は連絡があります)

場所: 逗子協会別館

お問い合わせ: 羽成 淳

080-6702-2308

体験レッスンもできます。

※予定は変更されることもありますので、日程は直接お問い合わせください。詳しくは専用ウェブサイトをご覧ください。

<http://zushi-hatayoga.jimdo.com/>

※7月13日から行われる

「善通寺リトリート」の締め切りは6月20日です。

スワームー・ヴィヴェーカーナンダ

第156回生誕記念祝賀会および

マハートマー・ガンディー

第150回生誕記念祝賀会を開催

5月26日(日)、日本ヴェーダータ協会は今年もスワームー・ヴィヴェーカーナンダ生誕祝賀会を開催しました。スワームー・ヴィヴェーカーナンダ(スワームージー)の生誕156周年となる本年は、改革者として世界的に名高いマハートマー・ガンディーの生

誕150周年にも当たります。協会では、「スワームージーの著書を読んで、祖国への愛が千倍になった」という言葉を残したガンディーの生誕も共に祝うこととし、東京都豊島区の南大塚ホールにて以下のプログラムで祝賀会を執り行いました。なお、当日の写真は、次号のニューズレター（PDF版）に掲載の予定です。

<プログラム>

午後1時30分

祈願 信者

スワームージー・ヴィヴェーカーナンダ
への献花

定期刊行物『不滅の言葉』特別号披露
スピーチ

駐日インド大使 サンジャイ・クマール・ヴァルマ閣下

スピーチ

在コルカタ日本国総領事
笏賀（たが）政幸氏

スピーチ

「スワームージー・ヴィヴェーカーナンダ
とガンディーについて」

上智大学アジア文化研究所客員所員
ヴィヴェイク・ピントゥ博士
東京外国語大学アジア・アフリカ
言語文化研究所 外川 昌彦教授

感謝の辞

日本ヴェーダーンタ協会書記
鈴木 敦氏

午後3時

休憩、茶菓

午後3時30分

文化交流プログラム

賛歌 インド人グループ

賛歌 日本人グループ

賛歌 ヨーガ・スクール・カイラス

インド古典舞踊 バラタナッティウム

小久保 シュヴァ チャクラパーティー

インディアン・クラシカル・ダンス・
トゥループ

映画「マハートマー・ガンディー」

感謝の辞

祝賀委員会委員

ランジャン・グプタ氏



スワミー・ヴィヴェーカーナンダ
第 156 回生誕記念祝賀会

マハートマー・ガンディー第 150 回
生誕記念祝賀会

スピーチ

「マハートマー・ガンディー：彼の生涯の現代社会での意味と現代日本社会との関わり」

上智大学 アジア文化研究所 客員所員
ヴィヴェイク・ピントゥ博士

(以下は、ピントゥ博士よりご提供いただいた日本語版スピーチ原稿です)

ご出席のみなさま、こんにちは。

標記のような重要なテーマについてみなさまと共に考えるこの講演の機会を与えてくださった日本ヴェーダーンタ協会代表の Swami Medhasanandaji (S. メダサナンダ様)、そして同協会の組織委員会のみなさまに深謝申し上げます。

日曜日にこの講演を聞きにいらしてくださったみなさまにも心からお礼を申し上げます。

今年、2019 年は、Mohandas Karamchand Gandhi (M. K. ガンディー、1869-1948) の生誕 150 年の年にあたります。ガンディーは、非暴力の政治運動の創始者であり、インドの将来の姿についての先見性を持った倫理的に優れた賢人であると同時に実践的活動家でもありま

した。

ガンディーは、1869 年 10 月 2 日に生まれ、そして、1948 年 1 月 30 日に右翼のヒンデュー国粋主義者によって暗殺されました。マハートマー (サンスクリット語で、偉大な魂、という意味) というタイトルでガンディーを称えたのは、ベンガル地方の博識家にして 1913 年のノーベル文学賞の受賞者であった Rabindranath Tagore (R. タゴール) でした。



ガンディーは「マハートマー (偉大な魂)」として生まれたものではありません。そのようになったのです。つまり、彼には「マハートマー」となるまでの道のりがあったのです。この道のりがどのようなものであったかが私たちの関

心をひきつけるのであり、本日の講演のはじめの部分でお話しさせていただく内容です。ガンディーは彼のキャリアを弁護士としてスタートさせて、偉大な非暴力の政治運動の指導者となりました。多くの民衆の指導者であり自由への闘争の指導者となったのです。この自由への闘争は、大英帝国のインド支配を特筆すべき非暴力の政治運動によって終わらせました。そして、世界はこれに驚嘆したのです。

もしこれらが単なる事実ならば、ガンディーは、歴史から葬り去られた存在となったかもしれません。歴史は多くの彼のような人々を舞台から遠ざけてきました。しかし、ガンディーについては、そうではありません。私がこのように申し上げるのは、ガンディーが生まれてから 150 年ほどたった現在でも、世界中の人々がガンディーについて語り、そして学んでいるからです。

アメリカ合衆国第 44 代大統領であった Obama (オバマ大統領) は、「あなたが一緒に食事をしたいと思う人は誰ですか。」と尋ねられたのはそれほど以前のことではありません。彼はしばらく考えてこう答えました。「ガンディーです。」そして、こう付け加えました。「おそらくとても質素で少量の食事でしょうね。ガンディーはたくさん食べる人ではなかったのですから。」

私は、本日の講演を簡潔なものにするために、ガンディーの生涯を、下記のように、4 つの大切な事柄にまとめました。これらはとても永続的な重要性を持つものであり、現代社会との関連を持つものです。

1. 自由を求める独立運動の闘士としてのガンディー
2. 社会改革の指導者としてのガンディー
3. 倫理的・宗教的な思想家であり同時に活動家であったガンディー
4. 世界の未来を見据えた先駆者としてのガンディー

1. 自由を求める独立運動の闘士としてのガンディー

ガンディーの自由への闘争は、基本的に、不公正・圧制・人種的偏見・差別に対する熱心な戦いによって形作られました。それはまず、彼が 21 年間 (1893-1914) 生活した南アフリカで始まりました。ガンディーが経験した多くの事柄の中から次の 2 つの事例が、人種的偏見からの解放と平等を強く希求する彼の生涯について物語っています。

- a) 1893 年に、南アフリカの Pretoria で、一等車の座席に座っていたガンディーは、有効な切符を所持していたにも関わらず、有色人種だという理由で、

列車から放り出されました。

b) 1893年に、南アフリカ大統領の Kruger の自宅の前の歩道を歩いていたガンディーは、その歩道を有色人種が歩くことはできないという理由で、警官によって暴力的な方法で排除されました。

上記のどちらの場合でもガンディーは、報復するために暴力に頼る方法をとりませんでした。そうではなく、これらの出来事について、暴力での解決にかわる方法を考えたのです。それは、明らかにそして疑いなく、非暴力による方法でした。それは簡単なことだったのでしょうか。いいえ、そうではありません。しかし、彼は非暴力による解決方法を模索し始めて、多くの挫折を経験したにも関わらず、決して諦めなかったのです。

彼は、南アフリカ在住のインド人たちと中国人たちのコミュニティーの代表者たちと一緒に、南アフリカで年季奉公の労働者として過酷な労働を強いられていた人々へのより良い待遇を求めた請願を始めました。ガンディーたちが要求したのは簡素な事柄でした。それは、「私たちを、大英帝国の一員として扱ってください。」というものでした。この請願はしばらく続けられたのですが、認められることはありませんでした。

そこでガンディーは、「法律に対して、正義を手にするために、意図的で固い決意を持って、公然と、服従しない」という方略を考えついたのです。この不服従は、長期間投獄され、法的処罰を受ける事態に備える、ということでした。これは、牢屋に収監されて、重労働を強いられ、社会的に貶められ、そして経済的不利益を被る、ということの意味していました。しかもこの方略は、「敵対する者への愛情に根ざした、非暴力の抵抗」でなければなりませんでした。これこそが、「Satyagraha (サティアグラハ、非暴力抵抗運動)」の誕生でした。非暴力抵抗運動は、南アフリカに衝撃を与えました。インドを植民地支配していた英国はその後この運動を目の当たりにするにすることになりました。そしてそれは、次第に世界中に衝撃を与えたのです。

ガンディーの非暴力抵抗運動の現代世界への関連性は、次のいくつかの事例で理解できます。: 非暴力抵抗運動は、まず、アメリカのバプテスト派の牧師であった マーティン・ルーサー・キング博士 (Rev. Dr. Martin Luther King) は、1960年代に、アフリカ系アメリカ人の公民権運動を展開しました。次に、ポーランドでは1980年代に、グダニスク造船所の労働者たちが中心となり、レフ・ヴァヴェンサ (Lech Walesa) の指導で展開された独立自主管理労働組合「連帯」の運動がありました。そし

て、フィリピンでは、Ferdinand Marcos (マルコス大統領) の追放を実現した、1986年の、非暴力によって政変を起こす民主化革命がありました。ほかにもいくつかの事例があります。



2. 社会改革の指導者としてのガンディー

社会改革の指導者としてのガンディーを考えると、2つの重要な側面があります。まず、インドの有害な階級制度であるカースト・システムへの挑戦であり、次に、ジェンダーの平等（男女平等）実現への挑戦です。

a) インドの、著しく不平等なカースト・システムは、おそらく、世界中の人々に知られているでしょう。最下層の人々は、ヒンデュー教の寺院に参拝できないのです。これは、ガンディーにとって屈辱的と思われるもので、彼はこの状況を変えようと努力しました。彼が用いた基本的な方法は、常にそうでしたが、「会話をすること」でした。

この場合には、ヒンデュー教の最高位であるブラーミン（バラモン）の、改革に頑強に反対する人々との会話でした。この会話は成功することはなく、ガンディーと彼の仲間たちは、次第に、1925年3月の、南インドのケーララ州にある Vaikom の寺院にヒンデュー教の最下層の人々を立ち入らせる「Vaikom サティアグラハ」を立案するに至ったのです。

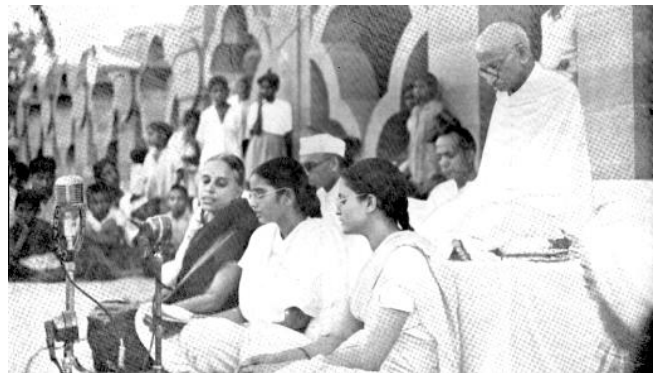
「私たちは、この、ヒンデュー教の最大の汚点を取り除く努力をしているのです。私たちが闘っている偏見は、いく世代にもわたって続いてきたものです。最終的な目標は、Travancore 州にあるすべての道を、最下層の人々に開放することです。」と、ガンディーは、サティアグラハを実践する人々に語っています。

現代社会との関連性：「Vaikom サティアグラハ」は、近年まで生理がある年齢の女性が参拝することを禁止していた、ケーララ州の Sabrimala 寺院への闘いについての画期的な展開につながっています。2019年に、インド連邦政府最高裁判所は、「生物学上の違いを理由として、女性に対して、いかなる事柄であろうとも例外的な規定を設けることは、憲法違反である。」との判断を示したのです。

b) ガンディーの「Satyagraha（サテ

「非暴力抵抗運動）」は、ジェンダーの平等（男女平等）を求めています。彼の妻であった Kasturba（カストゥルバ）や他の女性は、常に活動的な役割を演じました。1925年に、詩人で独立運動の活動家であった Hyderabad（ハイデラバード）出身の女性の Sarojini Naidu（S. ナンデゥ）は、Kanpur（カンプール）で開催されたインド国民会議派（インドの政党の一つ）の会議で、議長を務めました。これは主にガンディーの主張によって実現しました。

現代社会との関連性：インドでは、おおよそのところ、女性が政治やその他の分野で男性と平等な役割を演じるべきであるという原則が受け入れられています。これが可能であるようにサポートする制度が十分に整っているかについては、本日は検討する時間がありません。



3. 倫理的・宗教的な思想家としてのガンディーは、熱心にさまざまな宗教との会話を行いました。彼は、強くて継続的な友情を、ムスリム教徒、キリスト教徒、ゾロアスター教徒、ジャイナ教徒、シーク教徒、ユダヤ教徒たちとの間に築いただけではなく、無神論者や不可知論者たちとも友情を保ちました。これはなぜかということ、おそらく、ガンディーが、長期間インド本国を離れて南アフリカで生活して、この状態（Diaspora、ディアスポラ、本国から離散して暮らすことをいう）から多くの事柄を学んだからでしょう。そしてガンディーは、ヒンデュー教だけではなく多くの他の宗教の経典や文書を学んでいたからでしょう。

ガンディーは、宗教上のグループについて多数派とか少数派といった区別をしませんでした。すべてのインド人々はひとつのまとまりと考えていました。実のところ、ガンディーにとっては、人類は大きなひとつのまとまりなのでした。

活動家としてのガンディーの例をあげるとすれば、1946年10月から11月に Naokhali（現在はバングラデシュ領）での、宗教的原理主義者が起こした暴動とそれに続く恐れ・憎悪を鎮めるために、この地域に出向いた最初の人だったことがあげられます。彼は、現地に赴き、平和の回復を求めたのです。

ガンディーは1909年に「私にとって、神とは真実であり愛です。神は倫理であり道徳です。神は勇気なのです。--- 神とは良心に訴えるものです。」と書いています。

ガンディーの主催した祈りの集会では、賛美歌（ヒンディ語では bhajans）が、ほかのいろいろな宗教の経典と一緒に詠われたり読まれたりしました。

現代社会との関連性： ガンディーは、ヒンデュー教を信じておりその教えを実践していましたが、宗教をもとにして国籍を決めることには反対でした。彼は、宗教は共同・調和・信頼の基であり、コミュニティーと民主主義を進歩させるもだと考えていました。そして、各宗教・宗派が争うことには反対でした。

4. 世界の未来を見据えた先駆者としてのガンディーは、特に、現代の環境問題と関連があります。

インドは、1947年の独立以来、素晴らしい発展を成し遂げてきました。経済的に色々な分野で多くの有益な変化を経験しています。それでもなお、ガンディーの警告には真剣に耳を傾けなければなりません。

これはどのような意味なのでしょう。ガンディーは1928年に、「神は、インドが、西洋社会の後を追うような方法での工業化 --- 人間を機械の奴隷とすること --- を進めることを許さないでしょう。もし私たちの国が西洋と似たような経済的搾取を進めるならば、それは、世界中をあたかも作物を食い荒らすイナゴが襲った後のようにしてしまうでしょう。」と書いています。

インドの工業化には、恐ろしい犠牲を払って実現したものです。インドには地球上で最も大気汚染がひどい都市がいくつかあるのです。

ガンディーが思い描いたインドの姿はこのようなものではなく、それはいまだに実現していません。ガンディーが始めた「Constructive Program（建設的プログラム）」についての1947年の講演（Advice to Constructive Workers）の中で、ガンディーは、「貧困と失業がインドから無くならない限り、私には、私たちが自由を達成したと同意することはできません。」とも述

べています。

それでは、本日の私の講演の2番目の部分に進みましょう。ガンディーの生涯・思想の現代社会への関連性と、その日本との関わりは、どのように捉えることができるのでしょうか。私の考えを謙虚に、そして率直に申し上げて、みなさんと一緒に考えていきたいと思えます。

それは、(1) 物質的な所有への過度の強調と、(2) 国外からの人材の受け入れ、についてです。

(1) ガンディーの所有した品々とは、必要最低限のものでした。下に示した写真が、ガンディーの所持品です。(写真はPDF版ニュースレターに掲載)

ガンディーはとても質素で慎ましい暮らしをしました。これが、彼の必要なものと欲したものについての考え方だったのです。例えば、私自身はたくさんのものが欲しいかもしれませが、私は本当にそれらを必要としているのでしょうか。今日の状況の中では、常に増え続ける私たち（ここにはもちろん、私自身も含まれていますが）の必要なものと欲しいものが地球にとってどのようなダメージとなるのか、という意味が加わるのです。日本の人々は、物質主義の人々なのではないでしょうか。

次の事例が私の心配を示しています。私が教えている学生たちに彼らの趣味について尋ねると、多くの学生が次のように答えるのです。「ショッピングです！」このような答えはみなさんに何を語るのでしょうか。

(2) 日本の労働人口数は急速に少なくなっており、高齢化社会となりつつあります。これは、外国の人々が、ますます、日本の労働人口に加わるという意味です。日本は国外からの人々を受け入れる準備が、特に労働力を受け入れる準備が充分にはなされていません。日経アジアレビュー (Nikkei Asian Review) の2018年11月3日の報道によれば、「2019会計年度から5年間に、26万人から34万人の外国人労働者が日本に来るでしょう。」とのこと。

これはどのような意味なのでしょう。端的に申し上げますと、日本は、ガンディーが南アフリカで1893年に経験したような問題に向き合わなければならないだろう、ということです。労働者の権利、差別待遇、そして社会的・経済的な公平さは、真剣に関心を持たなければならない分野なのです。

人の肌の色と人種は、人が社会的に受容されるかどうかという問いで重要な意味を持ちます。国外から来た労働者たちの権利は、近い将来の重要な問題で、避けることができない問題です。

私には未来を予言することはできませんが、敢えて申し上げるとすれば、日本は、国外からの労働力の分野で、「ガンディーが行ったようなサティアグラハ」を経験するかもしれません。

すでに、国外から働きに来ていた労働者の自死や、雇い主から受ける不当な扱いについて、さまざまな報道がなされています。無言の差別的状況があると言えるでしょう。

本日の講演を、ガンディーの生涯についての滑稽な話で締めくくりましょう。なぜならば、ガンディーはとても巧みなユーモアのセンスを持っていたからです。

1930年のことでした。一人の婦人がガンディーに会いに来て、彼女の子供がお菓子を食べるのをやめさせるためのアドバイスを求めました。彼女は言いました。「彼は良い子ですけれども、お菓子のことになると、嘘をつきますし、こっそり物を持ち去る泥棒のようで、ずるいこともするのです。お菓子を食えることが彼の人生を破壊してしまうのではないかと心配です。ガンディー様、お願いですから、彼にお菓子を食えないように言ってください。」

ガンディーは、その子供を長い間見つめて、母親に言いました。「二週間たったら、再度、私のところにいらっしや

い。」

二週間後に、その夫人は子供を連れてやってきました。そして、彼女のリクエストをカンジーに思いおこさせました。「はい、もちろん覚えていますよ。」とガンディーは言いました。「こちらにいらっしやい。」と彼は子供を手招きしました。そして、その子の目をまっすぐに見つめてきっぱりと言いました。「お菓子を食べてはいけません。」

「それだけですか。」と母親は言いました。「あなたが言おうとしているのはそれだけなのですか。」彼女は驚きました。「なぜ、それを、二週間前に息子に言ってくれなかったのですか。」

「なぜかというのと、」とガンディーは答えました。「二週間前には、私自身がまだお菓子を食べていたからですよ。」

もし、ガンディーの生涯について、現代社会への一つのメッセージがあるとするならば、それは、「ガンディーは自分が実践せずに何かを語ることはなかった、ということでしょう。」

「私の人生そのものが私のメッセージなのです。」と、ガンディーは常に言っていました。

ご清聴、ありがとうございました。



日本ヴェーダーンタ協会、日本ヨーガ療法学会広島大会研究総会に出店

メーダサーナンダ・マハーラージが顧問を務めておられる日本ヨーガ療法学会の研究総会が広島国際会議場（広島県広島市）で行われ、協会は今年も書籍、CD、瞑想マット、線香、雑貨などを紹介・販売するショップを出店いたしました。4月18日（設営）、19日～20日（販売）の3日間のセーヴァを、福岡県から小林寿子さんが常駐のボランティアとして、また学会員の方で総会参加以外の時間にお手伝いいただき

いた方と合わせて8名で無事乗り切ることができました。

今回のハイライトは何と言ってもマハーラージの新刊『パタンジャリ・ヨーガの実践～そのヒントと例』のリリースと販売でした。マハーラージはご不在でしたので、リリースは学会理事長の木村慧心（けいしん）先生に行っていただきました。先生は開会式（19日）が始まってすぐに本を紹介され、その後胸に本を抱きながら、手を合わせて毎年マハーラージによって詠ぜられていたヴェーダのマントラを唱えられました。本の内容は『ヨーガ・スートラ』に関するマハーラージの講義ですのでまさにこの本にふさわしい新刊リリースだったと思います。





ショップではその後早速見栄え良く新刊本を積み上げて販売を開始しましたが、「販売するぞ！」と力む暇なくあれよあれよと3時間のうちに完売し、予約注文と合わせると183冊をご購入いただくという結果になりました。例年と異なり、ボランティアだけで運営する今年は不安がなかったわけではないのですが、終わってみれば、準備、設営、販売、売上、撤去、梱包、食事、学会との連絡など、すべてがつつがなく済みました。

特にボランティア同士の連携と信頼は素晴らしく、各自が学んできたことや興味あることを自分の言葉でお客様にお伝えし、且つそれが実際に伝わって「お買い上げ」という結果につなが

っている様子に、私はたいへん感銘を受けました。「各個人ができることを心を尽くしておこない、互いに信頼し合うことで、より個人の内なる力を発揮する」、そんな現場だったように思います。またそうした結果は、5年6年と、毎年地道に出店を積み重ねてきたことによる恩恵だとも言えます。毎日が順調にいくわけではなくても、ひとつのことを続けることによって得られることは、継続した者が味わう特権なのだと思います。

未知の場所であるにもかかわらず、すべてがうまく運び、すべての物事がオートで進行しているような広島でのセーヴァでした。そして途中で気づいたことが、「やはりタクール、マザーが動かしているのだ」ということでした。お一人で外出する際マハーラージは「一人ではない。三人です」とよくおっしゃいますが、きっと私は「一人ではなく、タクール、マザーと三人で」広島に行ったのでしょう。まるでタクールのオート操縦の波に乗ったようでした。そして協会のセーヴァだけでなく、日常生活もタクールのオート操縦に乗れるようになりたいと感じました。

現場のボランティア、および逗子協会で準備と後始末をしてくださったボランティアの方々に心よりお礼申し上げます。

(田邊美和子さん寄稿、一部編集)



忘れられない物語

黄金へと変えられた盗賊は私です

昔、ガジプル（現在のバングラデシュの一都市）に、ガンガー（ガンジス川）のそばに住む聖者がいた。

この聖者の住まいを、一人の盗賊が何日もの間こっそりで見張っていた。信者が大勢来てはいろいろな捧げ物をするのを目にし、どうやら聖者は銀器をいくつか持っているようだと思った。

「あの家にはかなりの宝があるに違いねえ」盗賊が聖者の家に押し入ると、入口の部屋に銀器やいろいろな食器が並んでいた。盗賊はその中から一番上等な物をいくつか手に取って、袋に投

げ込んだ。ガチャガチャ。袋は大きな音をたてた。

「はて、何の音だろう。動物でも迷い込んだか」音を聞きつけた聖者が、瞑想をやめて様子確かめに行くと、部屋に盗賊がいるではないか。聖者に気付いた盗賊は、袋を置いて一目散に逃げ出した。「これ、待ちなさい」聖者は袋をつかむと、慌てて盗賊の後を追いかけた。やがて聖者は盗賊に追い付き、こう言った。「何を恐がっているのだ。これはお前の物だ。私の家まで一緒に来れば、もっとあるぞ」こうして盗賊が再び聖者の家から出て行くときには、聖者の持ち物を全て手にしていた。

何年も後に、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ（スワミージー）がケダールやバドリーなどを巡礼しているとき、この極寒の地方で地面に横たわる一人のサードゥを目にした。当時は今と違い、旅をするのは一苦勞で、これといった定まった道順もなく十分な宿もない中、スワミージーは大変な思いをして旅を続けていた。凍えるようなこの地方に来たとき、寒さの中冷たい地面の上になすすべもなく横たわるサードゥを見ると、スワミージーは持っていた毛布を差し出した。

目を上げてスワミージーの姿を見たサードゥは、靈性を備えた人物であ

ることに気付いて自分の過去を話し始めた。「パーヴァーハリ・バーバーという聖者のことをお聞きになったことはありますか」サードゥは、聖者パーヴァーハリ・バーバーの家に盗賊が押し入った話をした。

「実は、私とその盗賊なのです。パーヴァーハリ・バーバーが私に触れた瞬間、私の全てが変わり、人生が変わりました。それまでの自分の行いをひどく悔やみ、以来、自分の犯した罪の数々を償うために毎日を送っています」

これが聖者の力だ。「神はどこにでもおられる」という真理を常に想うことは素晴らしき靈性の道だ。この道を歩めば、神とつながることができ、やがては神との合一が達成できる。

今月の思想

「まず、必要なことをしなさい。次に、できることをしなさい。すると突然、不可能なことをやっている自分がいるだろう」
(アッシジの聖フランシスコ)

発行：日本ヴェーダーンタ協会

249-0001 神奈川県逗子市久木 4-18-1

Tel: 046-873-0428

Fax: 046-873-0592

Website: <http://www.vedanta.jp>

Email: info@vedanta.jp